

共同研究 日本常民文化研究所所蔵資料からみる フィールド・サイエンスの史的展開

期間：2016 年～

〔所員〕 泉水英計 小熊 誠 佐野賢治 高城 玲 平井 誠 廣田律子

小林保祥と台湾パイワン族

——今年の活動をふりかえって——

泉水 英計

日本常民文化研究所所員による共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」は、国際常民文化研究機構の第1期共同研究プロジェクト「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」を通して学史への関心が深められたこと、また、アチック・ミュージアム時代から研究所に蓄積された非文字資料および民族学振興会運営資料の整理が進み比較的円滑に利用できるようになったことから、民俗学と文化人類学およびこれらの隣接諸学の史的展開の探求を目的として企画された。

この目的に沿って2018年度は（1）2回の公開研究会が開催された。加えて、（2）祭魚洞文庫の調査見学と（3）台湾原住民のワークショップへの出張がおこなわれ、（4）平塚市美術館を会場として台湾先住民研究に関連した公開セミナーも開催された。

（1）2回の公開研究会

2018年度第1回の公開研究会では、2018年12月21日に岸上伸啓氏（人間文化研究機構・国立民族学博物館）が、「環北太平洋地域の先住民族に関する研究史——日本人による研究を中心に——」と題し、遡上するサケ・マス漁撈を共通基盤に類似した文化要素が認められる同地域の先住民社会

の研究史について、とくに日本人研究者による調査活動に焦点をあてて今日までの流れを整理した。日本人の研究を地域別に見ると、アイヌに関する坪井正五郎以来の研究、サハリンに関する石田収蔵と宮本馨太郎の調査、アラスカに関する岡正雄、蒲生正男、祖父江孝男らの調査が、早期から開始されていることが確認された。他に、地域間の比較でも、谷本一之の民族音楽研究や煎本孝の共生と循環の思想研究などがあることも指摘された。このように日本人による研究は、層が厚く貴重なデータを収集している一方

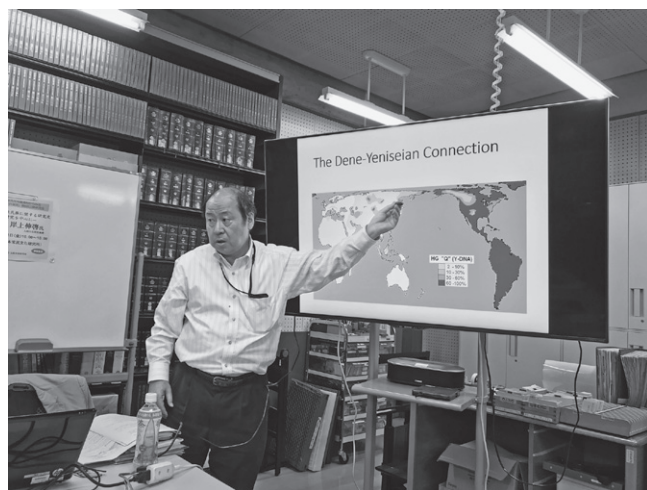


写真1 岸上伸啓氏（2018年12月）

で、発言言語の制約から国外の研究者に十分に活用されていない状況があることも指摘された。

第2回の公開研究会では、2019年1月25日に横山廣子氏（国立民族学博物館名誉教授）が、「我が師を語る——費孝通・中根千枝と中国でのフィールドワーク——」と題し、中国での文化人類学を牽引した費の調査活動を振り返った。費はマリノフスキーのもとで学位論文「中国農民の生活」（1939年出版）を書いた。一時その学術活動は抑圧されたが、1980年代に入ると中国社会科学院社会学研究所の初代所長、北京大学社会学系教授を歴任し、文化大革命後の学術研究の再出発を先頭に立って進めた。横山氏は、費が、中国社会の急激な変化に向けた実践的関心を抱きつづけた意義を再認識させた。加えて、国際的な学術活動を再開した費と早くから親交を結んだ中根千枝を介した日中の国際学術交流についてその学史上の位置を確認した。



写真2 横山廣子氏（2019年1月）

（2）祭魚洞文庫の調査見学

2019年2月6日には、関連資料の状況把握のため、流通経済大学に保管されている祭魚洞文庫の調査見学を行った。祭魚洞文庫は渋沢敬三の個人蔵書であるが、日本常民文化研究所が財団法人化され、大半は日本通運を介して流通経済大学に寄贈された。地方史、産業技術史、民俗学、文化人類学、考古学を中心に2万2400点がある。詳細な目録冊子があるが、今回の見学で、未刊資料の検索には不都合とわかり、流通経済大学図書館の協力を得てデジタル化することが決まった。



写真3 研究会場の様子（2019年1月）

（3）台湾原住民のワークショップへの参加

2018年10月27日・28日の両日、台湾の屏東県三地門郷大社パリヤン村にてワークショップ「パイワン学——歴史工作坊」が開催され、高城所員と泉水所員が参加した。このワークショップは、パイワン族が主体となって連続して開催しているもので、今回は文献研究とフィールド調査の対話をテーマに多彩な研究報告と活発な議論がおこなわれた。



写真4 台湾屏東県三地門郷大社の風景（2018年10月）



写真5 ワークショップ会場（2018年10月）



写真6 パイワンの言語で語る男性（2018年10月）



写真7 セミナーポスター（2019年2月開催）

同地は、1937年にアチック・ミュージアム同人が調査旅行で訪問した集落の近傍であり、その際に撮影した動画フィルムと写真は、現在、日本常民文化研究所が所蔵する映像資料になっている。ワークショップでは、そのなかから動画フィルム「台湾高雄州潮州郡下パイワン族の探訪記録」を上映した。当時の風景が身体動作をともなって記録されており、集まった研究者や現地住民から多くの感嘆の声を聞くことができた。

他のセッションには、近年刊行されたパイワン族村落のモノグラフ研究に対する現地住民の視点からの書評討論があり、頭目の家系に属する男性がパイワンの言葉で熱弁をふるい、パイワンの歴史を自らが自らの言葉で記述する必要性を訴えかけていた姿が印象的であった。また、中生勝美氏（桜美林大学）による小林保祥氏に関する報告があった。小林氏は日本統治時代にパイワン族の村に夫婦で住み込み、絵画を描き、工芸を指導しながら同族の調査を行った人物である。小林氏が描いたパイワン族の絵画は、白黒映像でのみ記録されている当時の状況を、鮮やかな色づけで表現しており、現在の現地住民の大きな関心を呼んでいた。

（4）平塚市美術館における公開セミナーの開催

関連して、2019年2月15日に平塚市美術館にて公開セミナー「小林保祥の描いた台湾パイワン族の世界」を開催した。前出の小林氏は、引揚げ後は平塚で余生を過ごしたことから平塚市美術館に絵画作品が寄贈されたが、これまでは公開されておらず、今回が初めての展示公開となった。この機を捉え、カトリック平塚教会ほか市内の施設に残された他の作品および親族の所蔵する作品を集め一般の鑑賞に提供し、作品を解説する講演をお

こなった。

まず、中生勝美氏（桜美林大学）から「小林保祥の生涯とパイワン族民俗絵画の解説」と題する講演があった。小林氏は台湾総督府の『台湾蕃族調査報告書』（1917-21）の編集を通じて台湾先住民に出会い、パイワンの養女をもつような親密な関係のもとでパイワンの生活を観察した。その記録の一部は『高砂族パイワヌの民芸』（1944、三国書房）として出版されている。

つづいて高城所員から「アチックフィルム・写真と台湾パイワン族——現代に生きるビジュアル資料——」と題する講演があった。高城氏は、パイワンを撮影したアチックフィルム（1937）の撮影地での上映会（2010、2011）での体験を取り上げ、映像記録からの再現という観点から分析を進めた。無声フィルムの上映が、身体を介した記憶を呼び覚まし、掛歌の唱和といった情緒的な感情の共有が生じたように、同一の対象を描いた小林の油彩画は、白黒の映像記録に欠落した色彩を再現する。

加えて、美術館に展示された小林氏の絵画作品を鑑賞しながら、とくに500号の大作「高砂族の生活」と題された作品を中心に、パイワン族の当時の生活についてギャラリートークの形式で質疑応答を重ねた。

本セミナーでは、小林氏の絵画は美術作品としての価値にとどまらず、彼が日本統治時代に行った民俗調査の資料としての重要性という意味を持っていることが改めて確認された。



写真8 平塚市美術館でのギャラリートーク（2019年2月）

以上、（1）から（4）にわたる本年度の活動経過を振り返った。外部講師を招き特定地域の研究史あるいは特定の研究者の研究歴を辿る研究会は、比較民俗研究会との共催で毎回多くの参加者を集めた。今後もこの形態で続けていきたい。史資料の整理については、祭魚洞文庫目録のデータ化に着手したが、「常民研運営資料」の活用促進という観点からこのような作業も継続する必要があるだろう。

■ 2018年度の活動

- 農村文化ゼミナール参加および旧西置賜郡での民俗調査活動に関する調査 2018年8月4日～5日
農村文化研究所他 泉水英計
- シンポジウム 2018 パイワン学歴史工作坊参加 2018年10月26日～29日
台湾屏東県三地門郷大社パリヤン村 泉水英計・高城玲
- 第6回公開研究会「環北太平洋地域の先住民族に関する研究史——日本人による研究を中心に——」岸上伸啓（人間文化研究機構） 2018年12月21日
- 第7回公開研究会「我が師を語る——費孝通・中根千枝と中国でのフィールドワーク——」横山廣子（国立民族学博物館 名誉教授） 2019年1月25日
- 祭魚洞文庫の現状把握調査 2019年2月6日 流通経済大学図書館 泉水英計・高城玲・全京秀・窪田涼子
- 研究セミナー「小林保祥の描いた台湾パイワン族の世界」／「小林保祥の生涯とパイワン族民俗絵画の解説」中生勝美（桜美林大学）・「アチックフィルム・写真と台湾パイワン族——現代に生きるビジュアル資料——」高城玲 平塚市美術館アトリエA 2019年2月15日